

『明文抄』（四、人事部、下）

昔下和猷<sup>レ</sup>宝以離<sup>レ</sup>趾。靈均納<sup>レ</sup>忠終於沈<sup>レ</sup>身。（後漢書）

（12）『玉函秘抄』下

世皆濁<sup>レ</sup>リ我獨清<sup>ス</sup>衆人皆醉<sup>リ</sup>我獨醒<sup>タリ</sup>（屈原詞）

『玉函秘抄』下

世皆濁<sup>マ</sup>ハ何不<sup>マ</sup>泥<sup>ニ</sup>其泥<sup>ニ</sup>而揚<sup>マ</sup>其波<sup>ヲ</sup>衆人皆醉<sup>マ</sup>何不<sup>マ</sup>餽<sup>マ</sup>其糟<sup>ニ</sup>而飲<sup>マ</sup>其醪<sup>ニ</sup>（文選 漁父詞）

（13）『玉函秘抄』は遠藤光正氏『玉函秘抄語彙索引』並びに校勘に前田家本の影印がある。今これによった。

（14）曲と回の草体は似ているところがあるので誤写の可能性もある。

坂崎坦編『日本画論大観』上（昭和二年、アルス）六八二頁。

## 文学説話と撰集抄 卷八

下西善三郎

### 〈一〉 撰集抄の文学説話

私は、「文学説話」というものを考えている。この「文学説話」

（15）東京大学所蔵『酒茶問答』（天保二二年自序）による。

（16）中村幸彦氏「文人意識の成立」（岩波講座『日本文学史』第九卷所収）。

（17）竹治貞夫氏「楚辭の和刻本について」（『徳島大学学芸紀要』人文科学Ⅴ）第一五巻、昭和四一年三月）、「邦儒

の楚辭研究について」（『徳島大学学芸紀要』人文科学Ⅴ）第二二巻、昭和四七年九月）。

（18）竹治貞夫氏「邦儒の楚辭研究について」（『徳島大学学芸紀要』人文科学Ⅴ）第二二巻、昭和四七年九月）。

本稿は昭和四十九年度金沢大学国語国文学会において口頭発表した際の原稿をもとに訂正加筆したものである。なお紙幅の関係で注を設けるべき箇所、多く省略に従わざるをえなかった。諒とされた

についてはやや詳しい論の展開が必要と思われるので、別稿を予定している。本稿では、「文学説話」についての基本的な考え方を示し、それとの関連において、『撰集抄』巻八を考察してみたい

と思う。

私の「文学説話」とはこうである。一口に言えば、ちょうど和歌が話の中核となっている説話を「和歌説話」と呼ぶことができるように、「文学説話」とは、漢詩句が何らかの意味で話の核としての位置を担っている説話である、ということが出来る。ここでは、やや幅を持たせて、説話を説話として語る（収録する）際、説話者が何らかの意味において漢文学世界の諸事象（具体的には漢詩文・漢学などである）に説話的な興味と関心を集中して説話を構成していると思えられるもの、と一応の定義付けをしておきたい。

具体的に、その典型的な例を、ここでは本稿の主旨に添わせていくために、『撰集抄』巻八から挙げて示す。

むかし、仁明の御時、小野の相公、とがにあたりて、隠岐の国へながされ侍りけるに、

萬里東ニ來ル何レノ再日ゾ 一生西ニ望ム是レ長キ襟アラム

とつくれり。みかどきこしめされて、流罪をとどめたく思しめされければ、綸言すでにくだり侍りぬるほどに、力なくて流しつかはされ侍りぬ。つぎの年、めしかへされけるは、「去年の再日の名句によるぞ」とおほせくだされ侍りける。げにもありがたき句におぼえ侍り。萬里の浪にたゞよひて、一生西におもむくらん、まことにかなしかるべし。（後略）…………

（岩波文庫本『撰集抄』巻八、第80話）

右の例に見る説話の構造は、状況A（左遷配流という下降状況）

↓状況B（召上げ返しという上昇状況）の変化として把握できる。

そして、その構造上から注意すべきは、状況の転換点における漢詩

句の機能についてである。即ち、漢詩句が説話の中で正の有効性をもって機能していることに気付かされるのである。この種の、漢詩文が説話の中で一つの「徳」として機能する説話を分類して私は「詩徳説話」と呼んでいるが、この種のものは、『撰集抄』巻八でも、例えば、「簞詩事（76）」「清慎公大將辭表詩事（79）」「後江相公送舊里詩事（81）」など他にも見ることが出来る。これらの例に見る如く、漢詩句を説話の構造の中に取り込みながら成った説話を、今、「文学説話」の典型的な例として挙げ得るのである。

右に「文学説話」の典型的な例を挙げたのであるが、ところで、私が「文学説話」という時の「文学」の語義について、現代的意味での「文学」との混同を避けるために、或いは明確に区別するために、若干の注を付しておきたい。即ち、中世人の認識に沿って言えば、「文学」とは「漢詩文及び漢学」の義である。ならば、何故、例えば「詩文説話」などとはしないで「文学説話」とするのか。このことについては別の拙稿で触れたこともあるので、ここでは要点のみ挙げることにする。つまり、個々の説話一つ／＼に対して名付けられたものではないけれども、ある共通した意識によって一つの群として束ねられた説話層に対して、この「文学」の語を冠している事実を中世に見るからである。即ち、十三世紀半ば頃成立の『古今著聞集』が、巻四にそれ以前には見ることでできなかった篇目である「文学」第五を他篇目と同等の位置で設けているという事実である。『著聞集』編者橋成季は、「文学」の概念をどう捉え、その名を冠した篇目にどのような説話を類聚したのか。成季は、「文学」篇の序文に記す如く、「文学」の概念を、実学的傾向と対社会的効

用を持つものとする古代からの考え方と軌を一にして把えつつ、漢詩文・漢学に関する説話を「文学」篇に収めたのである。その内容はとりどりであるけれども、「文学」の直接の対象を漢詩文・漢学に関わるものに限定しながら、巻第五「和歌」第六と厳密に区別しつつ「和歌」篇と対置せしめたのである。粗雑ではあるが、如上の事情によって、「文学」の語とそれに関わる中世人の認識を現代に借用しようと言うのである。

さて、以上に見る「文学説話」は、『撰集抄』においては巻八に集中して現れる。この巻に収められる説話は、「なにとなき物語のしなぐなる詩歌雑談」（撰集抄・跋）と編者自身によって意識されている種類のものが殆どであることは注意されたい。この巻八の大部分が、後人の心なき増補でなければ、『撰集抄』編者の、話そのもののへの興味につき動かされての編著であると考えざるを得ないからである。ここで、巻八所収説話の内容を検討して次の図表を得る。

＜巻八＞		文学説話	
102・	89	76	和歌説話 （左遷配流のモチーフ）
103・	90	77	
104・	91	78	
105・	92	79	
106・	93	80	
107・	94	81	
108・	95	82	
109・	96	83	
110・	97	84	
	98	85	
	99	86	
	100	87	
	101	88	

各術譚

仏道結縁譚

上の図表で、「文学説話」と「和歌説話」とが各々ブロックを形成しつつ隣接して配置される図を見るのだが、これは、例えば『今昔物語集』巻二十四における「文学説話」と「和歌説話」の隣接配置<sup>註7</sup>、あるいは前にも述べた『著聞集』における「文学」篇と「和歌」篇の隣接配置と同様、それら以前からの地盤的なものとしての「和漢並列の思想」のコンテクストの中において、更に言えば、和と漢との並列の、説話の側からの展開として、充分に留意されていなければならないだろうと思う。

ところで、『撰集抄』は、西尾光一氏の所謂「説話評論」の宝庫でもある<sup>註10</sup>。では、巻八の中の「文学説話」に限って言えば、どのような「説話評論」が付加されたのだろうか。『撰集抄』巻八における「文学説話」八話についてその「説話評論」部を見てすぐに気付くことは、説話部の主題・構想に直接関係する批評が添加されているというのではなく、およそ説話の構想上から遠く離れた地点で漢詩句そのものに関心を集中し、詩句の評釈を試みているのが殆どであるというところである。次にその実例を示す。

延喜のはじめつきた、都良香、きさらぎの十日比、内へ参りけるに、朱雀門のほとりにて、春風に青柳のなびきけるをみて、  
 氣觸れては風新柳の髪を梳り  
 と詠じて、下の句をいはむとて、打ち案ずるに、朱雀門の上より、赤き鬼の白たうさぎして物おそろしげなる、大なる聲して、  
 氷消えては波舊苔の鬘を洗ふ  
 とつけて、かきけすごとくに失せにけりとなん。

（以上説話部）——（以下「説話評論」部）

この詩、心ことはたぐひなくぞ侍る。げにも、風大虚に吹ば、  
氣は四方に晴て、青柳髪と見えて風に梳れり。はじめて氣はるる  
春にもあれば、新柳と云も心よろしかるべし。鬼のつくる下の句、  
又ありがたくぞ侍るべき。水は氷に閉られて、みぎはの蘆苦すゝ  
がるゝ世もなきを、氣はれて新柳風に梳る。春は氷ひらけて、苔  
の根やゝ水に洗はれ、柳を髪とすれば、苔を鬚とする、木草の本  
末なる心までこめたり。かへすゝおもしろき詩也。

（卷八、第78話、傍点筆者）

もちろん、西尾氏の所謂「説話評論」の形態は、一つには、説話  
に対する批評添加という形で説話伝承者の自己表出に依つて、二  
つには、説話そのものの自体に既に内在する批評・判断に依つて成立  
するわけである。従つて、説話における評論性ということは二重の  
層を持つことになるのだけれども、説話者のより主観的な自己表出  
という点においては、説話伝承者自身の書き加えによる批評・感想  
部を見るのが直接的であること、言うまでもない。この観点から、  
右の例を見ると、付加された「説話評論」部は、説話部とは全く無  
関係には言わぬまでも、説話のプロットに関与する形で添加され  
てはおらず、説話が語りかける内質とは断り結ばずに遊離したところ  
で成立しているのであつて、評者の関心は詩句の評釈そのものに  
向けられているという実状なのである。少なくともここには、「説  
話評論」の自照的・随筆的発想において期待されるべき、中世人とし  
ての新しい認識なり世界観なりの積極的な表明は、全くなされてい  
ないとなければなるまい。即ち、『撰集抄』卷八の「文学説話」  
における懇切丁寧な詩句評釈は、平安朝貴族文人の漢詩句を朗詠す

ることはあり得ても、味読するまでの理解力を持ち合せてはいなかつた当時の説話享受者に対して取られた評者の心使いであつたか（それは多少の術学的色彩を帯びているにしても）とも考えられ、又、「心とまるべきひとふし」（『撰集抄・跋』）を期待してなされたものかとも考えられるのだが、詩句評釈にこだわる限り、遂に、評者の中世人としての自己主張を形成する場とはなり得なかつたといふなければならぬのである。

（二） 卷八の方法——依拠出典から

ところで、『撰集抄』の著者が懇切丁寧なる詩句評釈を付加せずには居なかつた漢詩句そのものについてみると、それらの詩句はおもに平安朝文人の手になる漢詩文からの摘句であることが指摘できる。この事情は、『江談抄』第四や『今昔物語集』卷二十四、『著聞集』文学篇などに見る「文学説話」もまたほぼ同様である。いわば、断章摘句ということによつて「文学説話」を構想する手法は、後にも触れるように、『江談抄』以来幾分かの変容を見ながら中世に入つても一つの伝統として承け継がれているといふことができる。逆に言えば、漢詩の詩句を部分的に切断し、一個の独立体としてそれにまつわるエピソードなどをも内に取り込みながら鑑賞するという下地がなければ、摘句としての漢詩句は説話の中に位置を占めることができなかったかも知れないのである。況や、その漢詩句を核に据えて説話を新たに構想するなどといふことは殆ど不可能でさえあつたかも知れないと言ふべきなのである。しかも、摘出され、

説話のために活用された詩句が、対句であることも注意しておくべきであろうと思う。

では、そのように対句構成の佳句を断章取義風に説話の中に取り込ませることを可能にし、且つ、容易にした外部的条件とは何であったのだろうか。これについては、対句構成の佳句選の出現ということが先ず考えられねばならないが、それについて、私達は、平安朝前期に大江維時（888〜903）によって編まれ、後の佳句選にまで影響を及ぼすこととなった『千載佳句』二巻及びそれ以来の佳句選の伝統を一つの回答として用意することができる。金子彦次郎氏の『千載佳句』本文及びその研究によれば、この書は、中国の主として唐代詩人の詩から名句と思われるものを二句一聯ずつ抄出し、上巻を五部（四時・時節・天象・地理・人事）、下巻を十部（宮省・居所・草木など）に部類し、各部を更に細分して、計二百五十八部門に分類・配列したものである。尤も「これら（『千載佳句』）の部類のメルクマールはすべて宮廷もしくは貴族的生活にかわりのあるものであつて、一般庶民もしくは地方的農民の世界に触れるものは殆どない。ひとえに官僚詩人達が侍宴応酬もしくは遊覧応酬のための作詩参考書としての役目をもつもの」であつて、『千載佳句』の享受者層が官僚詩人達に限定されるものであつたにしても、この書は後に数多く編まれることとなつた佳句選の先蹤となつたばかりか、後代佳句選の部類、あるいは具体的詩句にまで強い影響を与えている点からも、先ず取り上げられねばならないのである。因みに、『本朝書籍目録』及び『通憲入道藏書目録』によつて、今は散佚して伝わらないが、本朝の佳句選と目されるものを拾ってみると次の

如きを挙げ得る。——『本朝秀句』五巻、『続本朝秀句』三巻、『日本佳句』二帖、『本朝佳句』二帖、『続本朝佳句』三巻、『拾遺佳句』三巻、『近代麗句』十巻、『当世麗句』二巻、『新撰秀句』三巻、『続新撰秀句』三巻、『一句抄』（以上、『本朝書籍目録』詩家部、和田英公氏『本朝書籍目録考證』は、これらは今佚書なることを考証している）。更に、朗詠に供した佳句選として、『本朝書籍目録』和漢部に、『和漢朗詠』二巻、『新撰朗詠』二巻、『拾遺朗詠』二巻、『和漢拾遺朗詠』二巻、等の書名を見出すことができる。

以上の如くに、多数の佳句選が存在したことは、漢詩の詩句を部分的に切斷して鑑賞するという下地が、たとえそれが最初は貴族文人階層のみに行われたものであつたにしても、中世以前に既に出来上つていたという証左になるものと思われる。こうした動きは、佳句選という具体的形として見られるばかりでなく、例えば、平安後期の漢詩の総集である『九条家本中右記部類紙背王朝無名漢詩集』についても言うことができる。この書は、律詩なら律詩の完全な詩型を収めるだけでなく、佳句麗句を摘出して収載するものは全体の16%に達し、又、完全な詩型のものにも朗詠に適する秀句には合点が施されているのであり、ここにも佳句鑑賞の動きの一斑を窺うことができるようにも思われるのである。

ここで、右に見てきた佳句選の出現と「文学説話」との両者が連絡を持つた接点について考えねばならない。先ず、佳句選の側からは、切斷された部分としての佳句が、独立体として単に朗詠のためだけ、或いは詩作上の辞書代りに活用されるためだけではな

く、それぞれに何らかの形で広く鑑賞される地盤をもつようになること、次に、説話の側からは、それらの独立体としての佳句が、説話的興味と関心を引くに足るだけの前後の事情を持っていること、という条件が満たされる必要がある。勿論、一つの「文学説話」の成立にとっては、この両者が互いの領分を否定し合うことなく歩み寄る必要がある。そのような両者の歩み寄りとは、具体的には、佳句選の中の佳句・麗句が相当の浸透力を持ちながら、貴族文化の手を離れて広く流行・流布し、且つ、そのようにして人口に膾炙する

間に説話的ふくらみを持たされていくという事実を通じて行われるはずである。ここで特記すべきは、周知の如く『和漢朗詠集』中の詩句・和歌の諸方面に於ける浸透力・影響力の甚大なることである。佳句選と説話の結合の端的な現象として、ここに『撰集抄』巻八の説話群が浮かび上がるのである。次に、巻八の「文学説話」の詩句、「和歌説話」の和歌についてその出典となるものを表示するところである。

説話 番号	詩句 又は 和歌	依 拠 出 典	備 考
76	紫塵嬾藏人 <sub>レ</sub> 掌 <sub>レ</sub> 手	『和漢朗詠集』 同 右 書	『江談』第四
77	三千世界眼前盡 <sub>レ</sub>	同 右 書	『江談』第四
78	氣鬻風梳新柳髪 <sub>レ</sub>	同 右 書	『本朝文粹』五
79	瀧山雲暗 <sub>レ</sub>	同 右 書	『江談』第四
80	萬里東來何再日 <sub>レ</sub>	同 右 書	『本朝文粹』九
81	前途程遠 <sub>レ</sub>	同 右 書	『白氏文集』卷第十六
82	官途自比心長別 <sub>レ</sub>	『菅家後集』聞 <sub>二</sub> 旅雁 <sub>一</sub> 480番	『古今集』真名序
83	我為遷客沙來賓 <sub>レ</sub>	同 右 書、自詠 476番	／
84	離家三四月 <sub>レ</sub>	『和漢朗詠集』	／
85	cf. 仁流秋津洲之外 <sub>レ</sub>	／	／
86	ナシ	『和漢朗詠集』 同 右 書	『新勅撰』 『拾遺集』
	うれしさを昔は袖に <sub>レ</sub>	773番	456番
	世の中にあらましかばと <sub>レ</sub>	750番	1299番

101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87			
花ゆゑに野をなつかしみ…	花ゆゑもあだなる名をば… 花ゆゑもあはしおほかる野べに… をみなへしおほかる野べに… 萩の葉に風おとづるゝ… 秋は猶夕ま暮こそ…	色香をもおもひも入ず… 我がやどの花見がてらに… 南無薬師あはれみたまへ… 雲のゐる越のしら山… cf: 花こそやどのあるじなりけれ (年ふれば)				こぞ見しに色もかはらで… さくらがり雨は降り来ぬ… 天の川扇の風に… 天の川かはべすゝしき… (せ)	きりぎりすいたくな鳴きそ… 今こむと誰たのめけん… 有明のこゝちこそすれ…	しら／＼し(と)しらけたる夜の… しらく／＼し(と)しらけたる夜の… かくばかりへがたくみゆる… いづくにか身をばよせまし… 白波のよするなぎさに…									
出所未詳	出所未詳 『和漢朗詠集』 280番	同右書 229番	同右書 101番	『和漢朗詠集』 124番	出所未詳 『拾遺集』 249番	『金葉集』 1015番	同右書 559番	同右書 85番	同右書 202番	同右書 201番	同右書 333番	同右書 332番	同右書 490番	同右書 804番	同右書 765番	同右書 733番	同右書 722番
『赤人集』に「春の野にすみれ…」 18660番	『古今集』 229番 『馬内侍集』にも不見	『義孝集』 24443番	『新古今集』 1444番	『古今集』 67番	年ふれば越のしら山…(拾)	／	／	『拾遺集』 50番	『拾遺集』 1089番	『拾遺集』 1088番	『古今集』 196番	／	『拾遺集』 1148番	／	『拾遺集』 435番	／	『新古今』 1701番

103	102
から衣うつ声きけば… 北斗星 前横旅雁一 草の庵 <small>(き)</small> なに露けしと… 露もらぬ岩屋も袖は…	『和漢朗詠集』 同 右 書 『金葉集』 『山家集』
351 番	352 番
568 番	7909 番
『新勅選』 323 番	『全唐詩』劉元叔「姜薄命」

〔朗詠集〕『菅家後集』のみ岩波大系本作品番号、他は『国歌大観』番号)

右の表で、「依拠出典」とは、『撰集抄』説話が先行説話をそのまま継承するものでない場合には、説話を構想する際、話の中核となる漢詩句或いは和歌を例えば『本朝文粹』等から或いは『拾遺集』等から直接抄出したというのではなく、『撰集抄』作者が依拠したのであろう文献の謂である。右の表から明らかな如く、『撰集抄』卷八説話の詩句・和歌は、その殆ど(約70%)が『和漢朗詠集』所載のものと重なっているのであって、これを偶然のこととするわけにはいかない。少なくとも、『撰集抄』作者が『和漢朗詠集』を座右の書とする程に愛着を示しながら参看したのだという事実、だれも否定しないだろうと思う。私は、『撰集抄』作者が佳句選の中でも最も広汎に行き渡った『和漢朗詠集』の詩句・和歌に依拠して卷八説話の大部分を構想したのであるということを認めたいと思うのである。今、二・三の例を挙げてこのことを確認したいと思う。

經信の師大納言八條わたりに住み給ひける比、九月ばかりに、月あかりけるに、ながめしておはしける。きぬたの音の外に聞こえ侍れば、四條の〔大〕納言の歌、

から衣うつこゑきけば月清みまだ寝ぬ人を空にしるかな  
 と詠じ給ふに、前裁のかたに、  
 北斗星 前横旅雁<sup>ノノ</sup> 南楼<sup>ノ</sup>月下<sup>ノ</sup>擣寒衣<sup>ッ</sup>  
 と云詩、まことにおもしろき聲して、たからかに詠するものあり。たればかりか、かくめで「たき」聲したらんと思ひおどろきて見やりたまふに、たけ一丈五六尺も侍らんとおぼゆるが、髪のさかさまにおひたる物に侍り。(後略)

(『撰集抄』卷八102話)

右は、四條大納言公任と鬼との唱和という体裁を取っているのであるが、作者は、もともとは時空を隔てて別個にあった「から衣うつこゑきけば……」(『新勅撰』に出)の歌と「北斗星前……」(『全唐詩』に出)の詩句の両者を「擣衣」の連想において結び付ける。しかしながら、この両者はいずれも『和漢朗詠集』に隣り合せて(351番と352番)出ているのであって、「擣衣」の連想において両者を結びつけることはたやすかった筈である。即ち、作者は、『和漢朗詠集』所載の和歌及び詩句を巧みに抄出・合成して一つの説話を構想したものと判断できるのである。ところで、右の和歌の作者は



『新勅撰集』及び『和漢朗詠集』では紀貫之となっており、四條大納言公任の詠とする『撰集抄』の作者は事実を誤っている。しかし、このような錯誤は『撰集抄』には数多く見られるのであり、西尾光一氏は錯誤例の主だったものを挙げて、全篇12話のうち41話を数えておられる程なのである。『撰集抄』のこうした人物的錯誤例のほか、事柄の事実的錯誤、時代的錯誤は、説話を構想する上において、作者にとっては歌なり詩句なりを詠する主体が先ず重要なではなく、歌そのもの・詩句そのもの及びそれが置かれた状況の方がより重要であつたことを物語るものであり、いわば、事実を重んずる説話から話そのものを享受する説話へと移り変っていく姿を示唆するという意味では、そうした誤謬も強ち責められるだけのものでもあるまいと思われるのである。ここでは、しかし、そのような錯誤が持つ意味を特に論ずるのが目的ではなく、『朗詠集』を利用・咀嚼して説話を構成した作者の手法が確認されればよい。例を挙げる。巻八第十一話（87）、

白波のよするなぎさに世をすこす海人の子なれば宿もさだめずの和歌の作者、或いは巻八第十六話（92）、

きりぎりすいたくな鳴る秋の夜のながき思ひは我ぞまされるの和歌の作者についてみると、前者は『新古今集』では「題しらず・読しらず」であるが、『撰集抄』では「海人」の詠。後者については『古今集』では「藤原忠房」の詠であつて『撰集抄』の如くに「素性法師」の作ではない。もし、『撰集抄』作者が逐一各原典に当つてこれらの説話を造形したのであれば、これらの基本的事柄において誤謬を犯すはずはない。ところが、これは誤謬でも誤認で

もない。『和漢朗詠集』所載の右二者の該当歌を見ると、それぞれの作者を「海人詠」・「素性」と記しているからである。ここにも、『撰集抄』が『和漢朗詠集』に依拠している証左を見出し得るのである。

右の例から、また巻八に於ける「文学説話」・「和歌説話」の詩句・和歌の出典の大勢から見て、『撰集抄』巻八説話の大部分と『和漢朗詠集』とが深い結合関係を示している事実を指摘し得るのである。『和漢朗詠集』の流行たるや破竹の勢いと称してもよく、右の如くに説話の骨組としてあつたばかりでなく、謡曲の諸作の地の文への融かし込み、あるいは説話集においても、例えば、

ある殿上人ふるき宮腹へ夜ふくる程に参りて、北の對の馬道にたゞずみにけるに、局におるゝ人の氣色あまたしければ、ひき隠れてのぞきけるに、御局の遣水に螢の多くすだきけるを見て、さきに立ちたる女房の、螢火みだれ飛びてと打ちながめたるに、つぎなる人、夕殿に螢飛んでとくちずさむ。しりに立ちたる人、かくれぬものは夏蟲のと、花やかにひとりごちたり。（後略）

（『今物語』第四話、有朋堂文庫・傍線筆者）  
に於ける傍線部は、それぞれ『和漢朗詠集』の、「螢火乱飛秋已近辰星早没夜初長」（巻上・夏・螢・186番）、「夕殿螢飛思悄然秋燈挑盡未能眠」（巻下・恋・182番）、「つつめどもかくれぬものは夏蟲の身よりあまされるおもひなりけり」（巻上・夏・螢・191番）の詩句・和歌がなければ、恐らく不可能でさえあつたかも知れないと思われるのである。

以上に、『撰集抄』巻八と『和漢朗詠集』との密接な関係を見て

来たのであるが、この事実関係は、王朝の文学遺産としての佳句選と説話世界との、本来的には異質な文学世界である両者の交流・結合を意味するのであり、「文学説話」についての言うならば、「文学説話」形成の地盤的なもの及びその形成の方法をも示唆するのである。

そこで、説話の中に含まれた漢詩句とその説話との相互連関という視点から「文学説話」形成の方法について、若干付言しておかねばならない。

「文学説話」形成の方法として、

A 詩句が先にあって、それを核として説話を構想する場合

B 説話乃至はその枠組が既に出来ていて、それに漢詩句をはめ込む場合

C 説話及び漢詩句を共に創作する場合<sup>註22</sup>

の三つを、理論上考え得るわけだけれども、『撰集抄』巻八説話は、このうちのAの方法を採用していると言うことができる。しかも、『和漢朗詠集』の詩句はそのまま利用しながら、例えば本稿(一)にも例示した巻八第五話「野相公左遷時詩歌事」(80)の如くに、詩句成立の事情や詩句の正しい意味を意識的に或いは無意識的に閑却することによって、新たに説話を構想し、恰もそうであったかの如くに仮構して提出する(Ⅱ「説話的虚構」の採用)というのが、『撰集抄』が採った手法だったのである。

A、の方法における「核」の意味を拡大して考えれば、例えば『江談抄』第四に見られる「文学説話」群も、この方法に依っているとすることができ。例えば、

暗作<sup>カニナルハ</sup>野人<sup>ト</sup>天興<sup>フ</sup>性<sup>リ</sup> 狂官<sup>リ</sup>自古<sup>ハ</sup>世呼<sup>ニ</sup>名<sup>ハル</sup>

故老傳へて云く、野相公が人と為りは不羈にして直を好む。世に其の賢なることを妬まる。呼びて野狂と為す。是れ則ち筆の字の音は狂の字の音なればなり。仍て此句を作す、と。

(『江談抄』第四。読みは筆者)

『江談抄』第四所収説話は、殆どすべて右例に見る如き形態を持っている。しかしながら、『江談抄』の、雑然と並べられたいくつかの短かい一条一条、即ち、すぐれた詩句や難解な詩句などに対する「話」は、もとより、前に『撰集抄』から引用して例示した「文学説話」の典型的なもの(巻八第80話)と比較して見れば明らかな如く、同じ方法に依るものとは言え、同レベルに置くことはできないものである。私見によれば、『江談抄』の、中国の文学ジャンルで言うところの「詩話」としての体裁は、私の「文学説話」において、年代的にも形態的にも最も初期に属するものである。前にも引例した『撰集抄』の、都良香の上句に鬼が下句を付けた説話(巻八第78話)にしても、『江談抄』は類話を持っているが、それはこういう具合である。

氣霽 風櫛<sup>ニ</sup>新柳髪<sup>ニ</sup> 氷消浪洗<sup>ニ</sup>舊苔<sup>ニ</sup>鬚<sup>ニ</sup>

故老傳へて云く、彼は此れ、騎馬の人なり。月の夜、羅城門を過るに、此句を誦す。櫛上に聲有りて曰く、「阿波礼<sup>あはれ</sup>、阿波礼<sup>あはれ</sup>」と。文の神妙なること、をのづからに鬼神を感じしむるなり、と。

(『江談抄』第四。読みは筆者)

この説話は、『江談抄』第四の中でも幾分初期の形態を脱していると言えようが、『撰集抄』説話の如くに、下句を鬼神が付けたの

だという説話はまだ成立していない。鬼神は「アハレアハレ」と讃辞を呈したに過ぎないのである。巻八第77話「都良香詩事」にしても、『江談抄』では、「三千世界眼前尽、十二因縁心裏空」の詩句に對し、「故老傳へて云く、下七字の作は思ひ得ること難し。嶋主弁才天、之を告げ教ふるなりと。」（第四、読みは筆者）の如くに、弁才天の智慧を拝借することによって都良香が作詩した話を残しているのである。これらの類似説話の伝承経路を確定する余裕を持たないが、両者がそれぞれある程度の関係を持つならば、この『江談抄』説話から『撰集抄』説話の如くへの筋書きの変容は極めて近距離にあると言えるものの、そこに、『撰集抄』作者の創意工夫<sup>イフ</sup>説話的發展を見ないわけにはいかない。

このことを、「文学説話」内部の潮流として観察する時、『江談』に見る初期の「文学説話」の中の漢詩句は、その「話」の直接の対象物件にすぎず、その意味において、「漢詩句重点主義」の「文学説話」と見ることができよう。これに比して、『江談』より一世紀半の時間をおいて出現する『撰集抄』説話では、漢詩句は話の直接的な対象物としてそこに置かれていたのではなく、状況の転換点における漢詩句の役割に注意すれば、説話の構成上の必須条件として、即ち、新たに構想された説話に構造上奉仕するものとして機能するようになるのであって、これを「構成重点主義」<sup>注8</sup>の「文学説話」と見ることができるのである。ここに、大筋として、いづれも漢詩句に関係しながら、「漢詩句重点主義から構成重点主義へ」という「文学説話」内部の潮流が認められようかと思うのである。無論、「文学説話」の名にふさわしい動的な<sup>ダイナミック</sup>「文学説話」は、如上の

『撰集抄』巻八に於いて見られたような、「構成重点主義」の「文学説話」であること、言を俟たない。

注1 久保田淳氏「和歌説話の系譜」（『日本の説話』中世Ⅱ所収・東京美術）が、和歌説話の性格規定を行っておられる。

注2 和歌説話における「歌徳説話」の対概念として、「詩徳説話」を考えている。

注3 永積安明氏「中世文学の可能性」（岩波書店）P181参照。

注4 拙稿「古今著聞集巻四文学第五について」（金沢大学語学

文学研究第八号）を御参照願えれば幸いである。

注5 文学篇第五序に、「又曰、「弘<sup>ホリ</sup>風導<sup>フウドウ</sup>俗<sup>ソク</sup>、莫<sup>ナカ</sup>尚<sup>ナカ</sup>於<sup>ニ</sup>文<sup>ハ</sup>」<sup>モリ</sup>教訓<sup>キョウコン</sup>レ民<sup>タミ</sup>莫<sup>ナカ</sup>善<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>学<sup>ハ</sup>」<sup>ナカ</sup>文学の用たる蓋かくのごとし。……」

（角川文庫本）

注6 『懷風藻』の序文に「風を調<sup>より</sup>へ俗を化<sup>す</sup>むることは、文より

尚<sup>た</sup>きことはなく、徳を潤<sup>ぬ</sup>らし身を光<sup>あ</sup>らすことは、孰<sup>た</sup>か学より先<sup>さ</sup>ならむ」（岩波大系本）。又、『日本後紀』弘仁三年（812）

五月廿一日條に、詔勅として「経<sup>きやう</sup>国治<sup>こくち</sup>家<sup>け</sup>、莫<sup>ナカ</sup>善<sup>ニ</sup>於<sup>ニ</sup>文<sup>ハ</sup>、立<sup>た</sup>身<sup>み</sup>揚<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>、莫<sup>ナカ</sup>尚<sup>ナカ</sup>於<sup>ニ</sup>学<sup>ハ</sup>」（国史大系本）とある。

注7 『十訓抄』との重複部分は省いて考えねばならないと思う。このことについても、注4の拙稿を御参照願えれば幸いである。

注8 この説話配列の順序は、原形本に近いと目される西尾光一氏の考え方（岩波文庫本、解説P.312-314）によっている。この配列は、筆者にとっても好都合となる。又、西尾氏の所謂、説話集における「連纂意識」をも見てとることができる。

注9 『今昔』巻二十四のうち、第26～第30が「文学説話」、第

31～第57が「和歌説話」である。角川文庫本による。

注10 西尾氏『中世説話文学論』（塙書房）P.164～182、P.282～299に詳しい。

注11 西尾氏『中世説話文学論』P.164参照。

注12 『江談』での「文学説話」は、第四（表題闕）、第五、詩事、第六、長句事に集中する。但し『江談』は、雑然とした短かい一條一條の集積物の観があり、中国の文学ジャンルで言う「詩話」の体裁である。

注13 『平安時代文学と白氏文集』（培風館）P.457

注14 川口久雄氏『平安朝日本漢文学史の研究』（明治書院）

P.485・486。

注15 金子氏前掲書（注13）P.451～453で、『和漢朗詠』・『新撰朗詠』は、原詩からの引用ではなく、『千載佳句』の詩句の襲用であることを考証されて、この三者の関係の密なることを論じておられる。

注16、17 新校群書類従本（巻485所収）による。

注18 図書寮叢刊『平安鎌倉未刊詩集』所収。

注19 川口氏前掲書（注14）、P.831参照。

注20 柿村重松校注『和漢朗詠集考證』（藝林舎）に詳しい。

注21 岩波文庫本『撰集抄』解説（西尾氏執筆）P.346～363。

注22 この三つの場合は、久保田淳氏が「和歌説話」形成の理論として提出されたものに直接学んだものである。前掲書（注1論文）参照。又、片桐洋一氏『伊勢物語の研究』研究篇の

「歌物語」形成の論を参考にした。

注23 現存最古の注釈書『和漢朗詠集私注』は、「小野篁配」<sup>セウレン</sup>流隈岐国、歸洛日寄唐客云々……と注している。（寛永六年版本金沢大学図書館蔵）

注24 「詩話」の語については、吉川幸次郎氏『人間詩話』（岩波新書）P.197以下参照。

注25 『今昔』巻24、第30話に構成重点主義の「文学説話」を見出し得る。但し、同書、同巻、第26～29話は漢詩句重点主義である。

#### 付記

本稿は、修士論文（金沢大学大学院、昭和51年3月修了）の一部をまとめたものです。御教示を戴いた先生方に御礼申し上げます。又、金沢古典文学研究会同人の諸先生方からも甚だ有益な御助言を戴きました。記して感謝の意を表します。

#### （追記）

なお、成稿後、本年度（昭和五十二年五月二十一日）の中世文学会春季大会にて、小島孝之氏が「撰集抄巻八の説話形成について」の題目のもとに、巻八と和漢朗詠集との関係について研究発表されたことを知りました。本稿と一部重なるところもあり、再考したい箇所もありますが、修論で考察したところをそのまま発表して御教示をお願いしたいと思います。